

平成23年度 学校自己評価表(最終評価)

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。		今年度の 重点目標	1 学校文化度の向上と地域からの信頼向上 2 学校教育力の向上 3 進路指導の充実 4 専攻科教育の充実 5 定時制教育の充実
-------------------	---	--	--------------	---

年度当初					評価結果	
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価
1. 学校文化度の向上と地域からの信頼向上	規律ある生活と「文武両道」による自立の促進	・校内に品位と落ち着いた爽やかな雰囲気を感じられる。 ・生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・全員が部活動に加入し、積極的に活動するとともに、切り替えを上手に行い、勉学に励んでいる。 ・自分の置かれた立場や場面に相応しい言動ができる。 ・教員に「率先垂範」の姿勢が浸透している。	・集団生活を行う上での基本的マナーが身につけていない生徒が一部にいる。 ・清掃、ごみ削減、節電等を含めた生活環境の整備に主体的に取り組めていない生徒が一部に見られる。 ・部活動の加入率は高いが、一部に学習との両立ができていない生徒がいる。 ・周囲に配慮して行動できない生徒が一部に存在する。 ・生徒に自ら範を示そうという姿勢が浸透しつつある。	・クラスや個人に対して指導・面談を繰り返すことにより、指導7項目を遵守させる。 ・普段の清掃時間やTEAS(鳥取県版環境管理システム)LHR等で生活環境委員会が主体となって生徒自身が環境整備に主体的に取り組む意識を高める。 ・部顧問・外部指導者・担任等が連携し、文武両道が実現されるよう働きかける。 ・粘り強く個別指導を行い、自己の責任と集団に与える影響について自覚させる。 ・職員が「倉吉東高のかたち」の実現に向けて、それぞれの取り組みを職員研修等で情報交換することにより、目指す方向性を共有する。 ・学びの主体性を育成するための研究を組織的継続的に行う。	・生活規律の大切さについて学年集会等で繰り返し指導することで、服装や挨拶などの改善が見られたが、一部改善できていない生徒がいる。 ・生徒会の声掛けに部顧問も協力し、部室の清掃・適正使用ができるようになった。 ・文武両道については習慣化出来た生徒も多いが、1・2年生の中には一部部活動をやめてしまう生徒が出ている。 ・各学年とも、その学年相応の望ましい言動が出来るようになってきたが、現状に満足する状態ではない。 ・目指す方向性の共有がなされ、機を逃さず生徒に必要な指導を行っている。(早朝・休日の補習、個別指導、面談など) ・専攻科生が下級生に授業を行なうことや、3・専合同課外等を通して上級生、下級生それぞれが刺激を受けながら自らの学びを深めることができた。	B
	中高連携の強化と高大接続の円滑化	・各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されていると同時に、本校も各中学校の実態を十分理解している。 ・生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 ・中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。 ・生徒が大学での学びについて理解し、単に大学に合格するための学習を越えて、生涯にわたる学習の基礎となる厚重な学びを行っている。 ・職員の誰もが本校の目標や実態を外部の人に説明できる。	・本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 ・数学、英語、体育以外の教科について連携があまり見られない。 ・高大連携について、大学紹介のレベルで終わっている。 ・年に数校大学を訪問し、大学の情報を把握するとともに職員への情報提供を行なっている。	・業者と相談してHPを利用しやすい形に改善するとともに、分掌担当の教員を中心に、全職員でHPの更新を行い、外部への情報発信に努める。 ・高校説明会で本校にきた生徒に対し、チューターを中心に多くの在校生が説明を行ない、生徒の視点で倉吉東高の魅力を伝える。 ・中学生特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加(参観、ティームティーチングなど)呼びかける。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・中学校説明会・進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、進路指導部や教務部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。 ・大学教育の研究を深め、教員や生徒が参加できる体験講座の機会を設ける。 ・倉吉東中学校との「スクラム教育推進事業」に取り組み、中部地区全体の中高連携を促進する。 ・高校生フォーラムや学園祭等、本校の特色ある教育活動を中学校等へ公開していく。	・7月下旬に倉東公式HPをリニューアルし、本校の教育内容が外部に伝わりやすいように改善した。現在1日平均1,000件のアクセスがある。 ・中学生を対象とした高校説明会では、チューターの生徒が出身中学の生徒に対して施設説明等を行い、生徒視点で本校の魅力を伝えることができた。 ・「中学生向け英語特別講座」の参加者は、開始以来過去最大となった。中学校に出向いての高校説明会では、本校の多くの職員が中学生や教職員に対する説明を行い、本校の取り組みに対する理解を深めた。 ・県外からの学校訪問に対して、必要に応じて関連する教員が説明に出向き、多くの教員で対応することができている。 ・鳥取大学より講師を招き「自己表現講座」を実施したり、実際に大学へ出向き「高校生科学セミナー」などに積極的に参加した。11月には本校職員の大学訪問や保護者対象の大学見学会を実施し連携を深めた。 ・スクラム教育では本校職員が中学校で授業を実施したり、中学校側から本校の授業参観および生徒の体験学習の実施など相互連携のもと事業が推進され、本県中高連携のモデルを示すことができた。 ・HPや学校説明会等で本校の特色を公開することが出来ている。	A
2. 教育力の向上	教員研修の充実と授業の工夫改善	・教員一人ひとりが、高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えている。 ・テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなるよう指導が行われている。 ・生徒の進路希望や発達段階に応じて、教員が集団として時宜にかなった教科指導を行っている。 ・指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。	・生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。 ・生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。 ・生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。 ・教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。	・「協同的な学び」について研究し、一体感のある授業実践を進める。 ・魅力的かつ効果的な授業を行うために、教科内はもちろん、他教科の授業相互参観を実施する。 ・年2回実施する生徒による授業評価アンケートの質問項目について、生徒の状況の把握や教員の授業に対する客観的評価ができるようなものに見直し・改善を行う。 ・授業評価アンケートの結果分析をより詳細に行う。 ・教科指導先進校教師招聘事業を積極的に実施し、事後の研究会を通して教科全体の指導力向上を図る。 ・予備校派遣研修を行い、研修報告書を作成し、活用できる指導ノウハウを教科会で共有化し、日々の学習指導で生徒に還元する。 ・定期考査、進路指導テストなどの問題作成において協議・検討を行い、学習到達度を確保するとともに、3年間を見通した教科指導を行う。 ・本校で計画、実施している様々な指導力向上プログラムが効果的に機能するように研修部を中心に随時チェックし、機能するように工夫する。 ・様々な教員研修がより効果的に行えるよう、実施時期や内容について研修部が中心になり計画・調整を行う。	・生徒に対して各教科の魅力や奥深さを伝えるために学校全体として授業改革に取り組み、昨年度と比較をすると徐々に伝わってきているが、満足できる水準に到達しているとは言えない。 ・目指す学びのかたちに近づくために今年度から「協同的な学び」を取り入れた授業実践に着手し、全教科で教科指導を行う中で、11月に岡山県よりエキスパート教員を招聘し行った研究授業では生徒が学びの主体となり、学び合うことで学習効果の高まりを感じ、事後の研究協議においても活発な意見交換がなされた。 ・生徒の進路希望や発達段階に応じて系統的かつきめ細かい指導を行うために教科指導力の向上を図ってきているが、生徒の学習が内発的・主体的なものになっていない面がある。 ・2月の鳥取県教育研究大会において本校の授業改革の取り組みを発表した。本校の教育理念や現状を多くの方に理解していただけるよい機会になった。一定の評価はいただいたが、現状に満足はできない。	B

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3. 進路指導の充実	教員の進路指導（進路目標を見据えた生き方指導）力の向上	・進路指導が単なる「出口指導」に終わることなく、生徒が「学力＝生活力」であることを自覚しながら、その意識が「今・自分・依存」だけでなく、「将来・社会・責任貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望と適性を理解し、生徒にとっての望ましい方向性をイメージしながら、3年間のどの段階においても適切な助言を行っている。	・学力向上対策が先行しがちになり、人間形成の基本的プロセスが抜け落ちてしまう場面もある。 ・3年間を見据えた系統的な教科・進路指導計画を立案し実行しているが、各時期において十分な達成度が得られていない場合がある。また目の前のことで精一杯となり、将来への意識を持つことができない生徒もいる。 ・生徒の志望と適性を理解するために生徒との面談を随時行っている（クラス担任、分掌主任など）が、学年や個々の教員により多少の情報量の差がある。	・学年会等を通じて生徒情報を共有しながら定点観測を行い、常に生徒の成長のプロセスを意識した指導を継続的に行っていく。 ・新旧3年・専攻科担任会や判定会等を進路研修会として学年の枠を超えて引き継ぎや内容を共有し、本校の進路指導の指針を明確化することですべての教員が適切な進路指導力を身につけられるようにする。 ・志望校決定や大学の知識だけを養うLHRにならないよう、生徒が将来を展望でき、自ら開拓しようという意欲をばぐむ進路LHRを計画・実践する。 ・読書・小論文指導を重点指導項目とし、生徒が現代社会を考察し語れるようになるよう、小論文活動を推進するとともに支援する力を養う。 ・3年間を見据えた教科・進路指導を効果的に行うために、綿密な学年会を行い、生徒との面談や家庭学習調査、各試験結果分析などを通して得た情報を教員間で共有し、生徒個々に応じた指導をきめ細かく行う。 ・学校訪問対応、中学校説明会等に参加することで広報力を養うとともに同じ方向性で組織的な指導が実践できるようにする。 ・全国的な情勢を掴むために、適切な時機をとらえて教員・生徒・保護者に対して研修会を実施する。	・3・専進路判定会においては、他学年の先生方にも多く参加していただき、生徒個々に応じたアドバイスをしていただいた。また、多くの職員で生徒情報を共有することができ、進路研修としても有効に機能した。 ・学年集会や進路LHR等を通じて、生徒の進路意識を高めることができ、大学合格だけでなく将来を見据えながら自己実現に向けて主体的に切り拓こうとする姿勢を養うことができた。しかし、集団全体が社会に視野を広げ、他者へ貢献しようとする姿勢ができていない。 ・担任を中心として生徒との面談を密に行い、生徒個々のつまづきや伸びしろを的確に把握し、学年団で共有することができた。 ・各教科で主体的に学力向上対策を推進し、弱点科目の克服も概ね良好に行われた。 ・保護者対象の進路研修会を8月、2月に行い、多くの参加者に情報を提供することができ、進路意識の向上にも貢献した。	B	・外部の講師を招いての進路講演会を企画・運営する。 ・学年の課題や問題点を解決する方法を模索する際に、各部署を統括し組織的に動ける体制づくりに努める。 ・進路指導部のどの教員も学校訪問対応、中学校説明会での説明ができるよう広報力を強化する。
	国公立大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現役合格者数150名。 ・ブロック大学レベル以上合格者数現浪合計70名。	(現役合格) ・昨年度名157名。一昨年度175名。一昨々年度126名。 (ブロック大学レベル以上合格者数) ・昨年度67名。一昨年度83名。一昨々年度55名。	・授業、放課後学習、家庭学習の差異化をはかり、それぞれの学習の意味づけや関連づけを面接を通して伝える。 ・生徒の学力実態を正確に分析し、遅進者指導を迅速かつ手厚く行う。 ・面接は、担任・副担任・教科担任・部活動顧問など多くの教員が関わり、生徒1人1人が何をどう学習すべきか具体的に支援し、適切な処方箋を与え続ける。 ・教員は校内・校外模試の意義を理解し、生徒に常時伝えるとともに、保護者に対しても学年通信やホームページを通じて伝達する。 ・各学年、各時期の到達目標偏差値を確実に達成する。	・夏の大山学習合宿では教養類型119名が参加し、OB・OGから適切な刺激を受けるとともに、「集団力」の意味を実感し、個人力を発揮することができた。 ・9月以降の放課後補習やセンター試験後の二次補習において、3年・専攻科合同でお互いが切磋琢磨することにより、学力の向上に努めることができた。 ・センター試験では、一昨年、昨年に次ぐ良好な成績を収めることができた。 ・目標程度の合格者数を出すために、二次力の強化に努めている。	B	・習熟度別の授業や補習を通して、クラスの枠を超えた集団化を行い、層別の効率的な学力向上を目指す。 ・進路行事ごとにホームページの更新を行い、保護者や地域に対して情報を発信する。
	難関大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・難関大学現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	(難関大学) ・昨年度16名。一昨年度33名。一昨々年度17名。 (東京大学) ・昨年度6名。一昨年度4名。一昨々年度2名	・各教科や教員間で昨年度の実績や指導法を確認伝達し、効果的な指導法を確実に新年度へ継承していく。 ・各教科で大学入試問題研究を充実させ、各志望レベルに応じた学力育成プログラムを作成し、授業や課外に即反映させる。また、適宜教科面談を実施し、個に応じた適切な情報提供や進路指導・学習指導を行う。 ・OBや専攻科生を活用し、実績ある先輩の学習法や心構えを下級生に伝える。 ・明確な目的をもった文理学術クラス検討会を定期的に開催し、一貫した指導を行う。	・難関大教科指導の体系が各科で確立されており、教科からの面談や個別指導も主体的に行うことができたが、生徒個々の志望との距離を縮めきれない部分もあった。 ・大山学習合宿後に難関大に合格したOB・OGを招いて座談会を行った。現役生から活発な質問がでるなど高い志を維持し意欲的な学習を加速させるきっかけとなった。 ・1年生においては鳥取県主催の難関大合宿、2年生においては岡山県合同の難関大合宿に参加し、他校の志を同じにする生徒や講師陣から多くの刺激を受け、意識をさらに高めた。	A	・超難関大・難関大志望者が学年・学校をあらゆる場面で牽引していくために多面から刺激を与え、将来のリーダー養成を目指していく。 ・専攻科廃止の影響を考慮し、低学年次から意識を向上させ、スケジュール管理をさせるための工夫を行う。
4. 専攻科教育の充実	予備校との差異化と適正な進学実績の維持	・県内各地から集まった生徒ひとりひとりが県立の専攻科である意味を理解し、学問に対して誠実に主体的に取り組むことによって、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・受験勉強を超えた学びの本質に触れ続けることにより、現役生をリードし、国公立大学合格者数の50名を維持する。	・中部地区の高校だけでなく、東部地区・西部地区の高校卒業生も入学している。 ・受かる大学ではなく、入りたい大学を目指し専攻科を希望する者が減ることなく、専攻科志願者が5年続けて定員を10人以上上回っている。 ・県民に感謝しながら学ぶ生徒が増えている。 ・近年順調に実績を挙げている。過去3年間の国公立大合格率は83%、修了生の東大合格者数は6名である。 ・専攻科廃止決定後の動向を、保護者・在校生を中心に注目している。	・8:00からの早朝学習と休日の校舎開放を行い基本的学習習慣を確立する。 ・「学び祭り」を実施(7月)し、各自が発表テーマを設定・研究し、プレゼンテーションを行う。(INPUT学習からOUTPUT学習への転換) ・県立図書館・学校図書館との連携を図り、あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・積極的なボランティア活動への参加を推奨し、社会貢献を志向する態度と肯定的自己概念を育成する。 ・3年生との合同課外を実施し、互いに刺激を受けながら学び合うようにする。 ・現役生への進路チューターを行い、自身の取り組みを振り返るとともに目標を明確化する。 ・専攻科OB・OGの講演会を開き、意欲を喚起する。	・遅刻をしないこと(時を守る)、掃除の徹底(場を清める)、挨拶の励行(人を敬うこと)の3つを特に生活指導の柱として重点指導し、学力向上の基盤を作った。 ・県立図書館・学校図書館の連携のもと「学び祭」を実施することができ、本選では19名が20分のプレゼンを行った。そのうち11名は、受験前に関わらず、1年生の発表学習の見本となるべく、基調プレゼンに向かいいた。 ・専攻科OB・OGが帰省するたびに、3年や専攻科生の同じ志望のものを集め、経験談を話してもらった。 ・秋課外、センター前補習、2次課外と、常に3年生と合同で行い、講座によっては、専攻科生が3年生に対して授業する場面もあった。 ・担任は毎日、日誌に論点を書かせ、社会全体の事を考えるよう添削し続けた。多くの生徒が昨年のセンター点を100点以上伸ばし、目標合格数も達成した。	A	・まだまだ、専攻科が個人の自己実現を補助する場ではなく、社会貢献について考え行動できる人材を育てる場であるという認識が理解されていないので、科内に留まらない活動をしていく必要がある。
5. 定時制教育の充実	進路保障と学力の定着	・生徒の進路実現に向けて基礎学力の定着がなされている。 ・わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。 ・課題に真面目に取り組み、提出物の期限が守られている。 ・生徒が心身ともに健康で、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。	・自己の将来像が描けず、進路意識に乏しい。 ・基礎的な学力が不足しているために、理解するのに時間がかかる。 ・生活環境面などで問題を抱え、積極的に学習に取り組めない生徒が少なくない。	・生徒個々の状況を職員間で共有し、学年を問わず個別面談を重視し個々に合った指導を行う。 ・わかりやすい授業を工夫し、基礎的な内容を繰り返し行い基礎学力の定着を図る。 ・1年次よりキャリアアドバイザーとの面談を効果的に取り入れ、生徒の進路意識の向上を図る。 ・保護者や、生徒が働いている企業の担当者との連携を密にし、進路実現に向けて協力を得る。	・4月の面接に加え、夏季休業後にも全生徒との個別面接を行うとともに、気になる生徒の家庭訪問を素早く実施して生徒理解に努め、毎週情報交換会を持って職員間で生徒の共通理解した取り組みを行うことで、休学者・退学者が減少した。 ・授業公開や授業アンケートを実施して授業を工夫したり、課外等を実施したが、進学対応の課外の成果がもう少しである。 ・キャリアアドバイザーと連携して3年次生の就職支援や、1・2年次生全員との面接・アルバイト相談等を実施することで進路意識が高まり、3年次生の就職試験を受けて正規採用される生徒が増えた。	B	・養護教諭、キャリアアドバイザー等との個別面談をもっと早い時期から実施し、その後の生徒理解や指導に生かす。 ・夏季休業中に登校日を設定し、生徒理解・指導に生かす。 ・特別支援の必要な生徒の個別指導を工夫したり、進路に対応した課外や添削指導を実施する。 ・授業公開・授業研究への参加者を増やしたり、他校視察をして授業改善に生かす。 ・卒業生等との座談会を実施し進路意識を高める。

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。